

那爛陀時代に印度佛敎史の轉換を示す眞言密敎

木村日紀

「序言」……過去に講じた吾人の印度佛敎史は佛傳や根本佛敎を初めとする敎理史經典史傳播史敎團史學派成立と分裂史及び佛敎中心地の變遷史であつて、民間信仰史を缺いた不完全なものであつた。今後の學者にはこの兩面を含む生々した印度佛敎史を講じて貰ひたい。民間信仰を含む經典は多數あるが、其を科學的に研究し其變遷を知る必要がある。指導者側の印度佛敎史は概して根本佛敎の表現運動や根本佛敎への復古運動を初めとして佛敎内の對立や佛敎以外の宗教に對する對抗運動へと發展し、最後に佛敎を中心とする全宗教の綜合統一運動へと轉じてゐる。然し民間信仰は時代の變遷や社會の事情に従つて横に現世の苦を厭ひ未來の淨樂を願ふ往生主義者と現世利益を求める現實主義者とが並存すると同時に、縦に往生思想の興隆時代と現世利益主義の興隆時代とが段階的に發展移動するを知る。筆者は從來印度大乘佛敎時代を四期に分類し更に各期を經典と學派成立とに分けてゐる。第一期大乘經典時代（龍樹以前に成立した大乘經典）。第二期大

乘學派時代（龍樹に起源した中觀學派が提婆や羅睺羅跋陀羅に繼承された時代西曆約一五〇—約三〇〇）。第三期大乘經典時代（龍樹以後彌勒無着世親迄に成立した經典西曆約二〇〇—約四〇〇）。第二期大乘學派時代（彌勒に起源する瑜伽行派が無着世親に繼承された時代西曆約二七〇—約四〇〇）。第三期大乘經典時代（世親以後那爛陀中心地時代の初期までに成立する經典西曆約四〇〇—約六〇〇）。第三期大乘學派時代（堅意や馬鳴及び中觀瑜伽論時代西曆約四〇〇—約七〇〇）。第四期大乘經典時代（那爛陀の中期後期に成立した經典西曆約七〇〇—約一〇〇〇）、第四期大乘學派時代（密敎諸派の成立時代西曆約八〇〇—約一一〇〇）等である。過去七佛と未來佛としての彌勒信仰は原始佛敎時代の敎團共通の信仰であり、過去や未來の多佛出現思想は早い時代から唱道され大小乘共通の信仰であつた。然し現在多佛出現説や現在十萬諸佛出現説は大乘思想と共に始めて勃興したもので、第一期大乘佛敎時代獨特の主張であり信仰であつた。現在十萬諸佛はこの閻浮提に出現するのでなく他土に出現し、其土は

清淨に莊嚴され歡樂に充されるのみでなく佛の相好光明神通威力等極めて勝れ、其壽命長遠であつて、釋迦の化儀と其説方全く異つてゐる。前の過去未來の諸佛は釋迦の生身を標準としたが、現在十萬諸佛は釋迦の報身を豫想し考察されてゐる。支那譯經史から檢討すると現在十萬諸佛は西曆二世紀前後即ち第一期大乘佛教時代に民間信仰の對象として顯示されたものと考へる。換言すると極樂往生系統の民間信仰である。就中特に民衆に崇拜されたのは東方の阿闍佛と西方の阿彌陀佛であつた。能化所化共に信仰したのは前者よりも後者であつた。民間信仰としては彌勒の兜率往生は原始佛教時代から大乘佛教全期に亘つて存したが、大乘佛教時代になつてから阿闍佛の東方妙喜國往生と阿彌陀の西方極樂往生の民間信仰が極めて隆盛となり、特に後者に對する信仰は印度大乘佛教全期は勿論現代でもアジア全佛教國に隆盛である。般舟三昧經や其異譯大集經賢護分によると「佛滅后正法滅せんとする時と諸國戰亂の時に往生信仰閻浮提に興起する」と記してある。よつて往生信仰は惡世亂世を厭ふ民衆の信仰として發生したことが推考出来る。斯る時代を印度史に探ると Maurya 王朝衰退直後 Sunga 王朝の Pushyamitra の廢佛運動と其後の群雄割據の西曆前一八五—西曆三八八の亂世を指摘し得るのである。斯る往生思想と共に第一期の大乘佛教時代から普賢文殊彌勒觀音等の諸菩薩の願力に縋り現世利益

那爛陀時代に印度佛教史の轉換を示す眞言密教（木村）

を求める現實主義の民間信仰もあつたが、佛教へ入信せる婆羅門族等の過去の慣習に起源し時代の善惡を通じて增益息災調伏敬愛等の世俗的攘災招福を主とする祈禱中心の民間信仰も第一期大乘佛教時代から興起した。密教家は之を雜部密教と通稱するが、大乘佛教各期に多數の經典が成立し其の發展を示してゐる。彼の *Avikra* の陀羅尼集經の如きは其最も發達せるものである。大乘佛教第三第四期に誇る *Nalanda* や *Valabhi* が佛教の中心地になるまでの印度佛教史は前述の如く教團の教理學派の進展を表面とし民間信仰は其裏に流れてゐたが、*Nalanda* や *Valabhi* が佛教中心地と轉じた時代には、所謂純部密教によつて民間信仰を表面とする印度佛教史へと百八十度の轉換を示したのである。

(一) *Nalanda* と *Gupta* 王朝との關係……西曆四〇〇年末に入印した法顯は *Nalanda* 附近の華氏城等の佛教の繁榮を記しなから *Nalanda* に關しては只た舍利弗入寂の地として佛塔のあるを記すのみであつた。處で同七世紀の初期に入印した玄奘の時代には此處に多くの伽藍があり極めて隆盛で佛教研究の中心地となり、彼自ら五ヶ年この大學に留學し戒賢の下で護法系統の唯識を研究したのである。其記錄によると帝日王が中央に一伽藍を、其王子覺護王が其南に一伽藍を、次に如來護王が其東に一伽藍を、次に幼日王が東北に一伽藍を、次に其王子金剛が其西に一院を、第六に中印の王が其北

に一院を建立したとある。印度の史家は Gupta 王朝を正統の皇帝時代と後期の國王時代とに分けてある。皇帝としての系統には Chandragupta I (西曆三三〇—三四〇) / Samudragupta (同三四〇—四〇一) / Chandragupta II (Vikramāditya) (同四〇一—四一三) / Kumāragupta I (Mahendrāditya) (同四一五—四五五) / この皇帝が玄奘のころ帝日王 Sakraditya である。彼に Skandagupta (Vikramāditya II) (同四五—四六七) / Puragupta (同四七〇以前に死す) / Ghatotachagupta (年代不明) / Buddha-gupta (同四七七一—四九六) 玄奘のいう覺護王である。等の四人の王子があり、彼の後繼者が Skandagupta (Vikramāditya II) であつたけれどもが皇帝としての Gupta 朝の正系統である。これ以後の衰微時代を後期の Gupta 國王時代と稱す。次の後繼者が pura Gupta 次が其王子 Nārasimha gupta (Balāditya I) (同四七三に死す) / 次が其王子 Kumāra gupta II (Kramāditya) (同四七六一—四七七) / 次が前記の Buddha yuptya / 次が Tathāgata-gupta で玄奘のいう如來護王で年代不明である。次が玄奘のころ幼日王 Balāditi II (同五一〇—五一二直前に死す)。次が其王子 Vajra で玄奘のいう金剛王である。以上の如き順序で統治したが金剛王時代に西印の勢力家 Yasodharma deva に征服され殺された。茲で Gupta 王朝は滅亡状態となつたが、尙を最後期の同朝の諸王が十三人繼續して同七世紀まで續い

たのである。玄奘のいう最後に一院を建立した中印の王とは Gupta の副王の役にあつて Pundragarbhana を統治した Datta 家の一人であることが判明した。西曆七世紀の後半に入印した義淨の記録には Nalanda に八院三百房あると傳へてゐるが、玄奘當時の六院以後の二院の建設者は不明である。然し西曆八一五—八五〇まづ統治した東印度の Pala 王朝の Devapāla が Nalanda に一寺を建立した記録の銅版刻文が一九二一年に Nalanda から發掘された。其によると當時爪哇の國王で勢力あつた Balaputra-Deva が祖先の菩提と自己の冥福の爲め Nalanda に一寺を建立し其維持の爲め五ヶ村を寄附せんと其一切を Devapāla 王に依頼したのである。Devapāla は其の依頼を領内一領主 Balavarman に命じて完成したのである。Balaputra-Deva はポロプツウル本初佛の制底の建設者であつた。よつて Nalanda には八院あつたことなる。Gupta 朝の金剛王以後印度の統治權は Malava の Ujjayini の王 Yasodharman-Deva に移り、最初 Gupta の屬國たりし Malava の下に Gupta の遺族は屬國王となつたのである。其後その領地たりし Thanesvara が有勢となり全印の統治者と轉廻し、其最高に達したのは Harshavardhana で玄奘のいう戒日王 Śīladitya で西曆六〇六—六四六の人である。彼の兄 Kātyavardhana は佛教信者で般若心經を念誦し守護の聖典とした。戒日王も後には佛教の保護者

となりかつ阿育王に等しき理想的善政を行ひ、Gupta 朝に次いで極めて平和な國運發展の黄金時代を展開したのである。玄奘の入印はこの時代で彼もこの王に尊敬されたのである。

西曆六四八年戒日王の後は其勢力衰微し一時北印は群雄割據の巷となつたが、Magadha の Gopāla が勢力を得て七三〇年頃 Pala 朝を起し、Behal の Odantapura を主都とし Magadha と Bengal に勢力を得て遂に全印の覇權を握つた。この一族は熱心な佛教徒であつて Vikramasīla 等の寺院を建設した。後に Vikramasīla は佛教大學として西曆八〇〇—一二〇〇まで印度佛教最後の中心地となつてゐたのである。然し Nalanda は前述の如く Devapala 王時代も隆盛であつたが文獻によると十一世紀の Mahipala 王時代まで其傳統を保つたこと明かである。Nalanda が佛教中心地となつた遠因は舍利弗の舊蹟であつたからであらうが、其近因は世親が數論學者 Varsaganya の弟子 Vindhyaśāstra の學說を打破り七十眞實論を作つたことが Chandragupta II や Kumāragupta I を感化し、其結果六院が建設され佛教研究の中心地となつたものと考へる。

(二) 眞言密教とタントラ密教……法顯の「佛國記」や玄奘の「西域記」には印度に獨立せる密教の存在を記してゐないが、義淨の「西域求法高僧傳」には初めて其存在を記す。義淨と同時に入印した無行が北印で遠逝せる前に「大日經」を

那爛陀時代に印度佛教史の轉換を示す眞言密教(木村)

初めて支那へ傳送しかつ支那本土へ寄せた彼の書に「近ごろ眞言教法あり國を擧げて崇拜す」と述べてゐる。西曆七二四年と其翌年に互り善無畏が無行請來の梵本に基き「大日經」七卷を支那で譯し、義淨自ら Nalanda に於て入壇し其要領を得んと努力したが其成就を得なかつたと述べてゐる。よつて民間信仰たる眞言密教が獨立し而も中印にまで傳播し、印度佛教史の表面に表われたのは Nalanda 佛教中心地となりし以後其中期即ち西曆七世紀の中頃と考へる。この「大日經」發生の地が印度の西海岸であることは梅尾博士の意見に同意す。然し博士は Lata を指摘するが筆者は Nalanda と共に當時佛教研究の中心地なる Valabhi とす。後日詳細にする。西藏傳によるとチルなる學匠が Nalanda に來り本初佛を基調とする「時輪教」宣傳の爲め宣傳文を其の門戸に貼り五百の學者と論戦したが何れも破れて彼の足下に歸伏し、以後中印に「時輪教」が普及したと傳へてゐる。勿論これは「大日經」が中印に普及した後と考へる。「金剛頂經」は十八會即ち十八部の經典が蒐集の形で成立したものである。「大日經」では一切の佛を佛部蓮華部金剛部の三部類に分つが、「金剛頂經」では之を佛部蓮華部金剛部寶部羯摩部の五部種族に分ちて發展を示す。この五部は「大日經」を引用する「不空羂索經」に現われてゐるから、「大日經」に次いで「不空羂索經」が成立し、其に次いで「金剛頂經」が西曆六八九年頃に成立

したと考へる。其は八世紀の初期に金剛智や不空が「金剛頂經」の初會六會の經を支那に譯してゐるからである。「金剛頂經」系統の金剛智や不空が其修行の爲め南印に來り龍智に師事してゐる點から考へてこの經が南印成立であることは明である。西藏傳によると「金剛頂經」の系統に屬する「時輪教」を佛が南印 Dhanya-kataka の大塔廟に於て説き Sam-bhara (Orisa) 國の王子月賢 Cndrabhara が之を感得したとある。更に金剛智の口説を其弟子不空が記述したものと稱せらる「金剛頂經義決」によると南天竺に鐵塔あり其塔下に於てある大徳がこの「金剛頂經」を感得したることになつてゐる。南天の鐵塔は梅尾博士が指摘せし如く Dhanya-kataka であり後に Amravati と稱す。此處が「金剛頂經」の成立地である。東密でも台密でも金胎兩部の本經を教理的不可分の關係にあると理解し解釋してゐるが、印度密教史から判釋すると金胎兩部互に成立年代や發生地及び其系統を異にしてゐる。八世紀の Buddha-guhya を十一世紀の Advaya-vajra も大乘佛教を「波羅密道」と「眞言道」に二分し金胎兩部を「眞言道」と總稱してゐるが、兩部の系統の異なる點も示してゐる。Nalanda 中心地時代の中期から Vikramasīla 中心

地時代（八世紀—十一世紀）迄に發達した「大日經」と「金剛頂經」に成立段階があると同時に、「金剛頂經」十八會中初會、六會、十五會が代表的に支那に譯されたが、其初會は即

身成佛として五相成身觀を中心とし、六會は即身成佛の譬喩として大樂思想を中心とし、十五會は即身成佛其自體の實現として大樂實行修行を中心として其發展段階を示しつつ、金剛乘、時輪乘、易行乘等を成立せしめてゐる。斯くて「大日經」は眞言密教なるも、「金剛頂經」は純然たるタントラ密教である。亦前者は Nalanda を中心とし後者は Vikramasīla を中心としたのである。

(三) タントラ宗教と其外來……印度教の「性力派」には Tantra 「シブ派」には Agama 「ギシキヌ派」には Saṃhita という聖典があり、其名は異なるも共通的にタントラである。

眞言密教を代表する「大日經」系統が婆羅門教や印度教の凡てを綜合統一してゐるが、若し其の綜合運動前に印度教の三派がタントラ化してゐたならば必ず其をも綜合したものと考へる。然し其がないので印度教三派のタントラ化は「大日經」を中心とする綜合運動後の發生と考へる。筆者は久しく印度教のタントラに影響されて「金剛頂經」の如き佛教タントラが發生したと考へてゐたが、其も誤りであると知つた。して印度教のタントラ化も佛教の其も凡て外來の大陽崇拜の Ma-tsi 僧の影響であるという文獻に接したのである。タントラの字義は織機（ハタ）であるが、其眞意は「男女兩性和合の修行を中心とする」點にあるのである。この定義によつて印度教三派のタントラの教義も「金剛頂經」第六會第十五會のタ

ントラの教義も明かに理解出来る。恩師 H. P. Sastri 博士の Nepal 國立圖書館の寫本目錄第一卷に Kubjika Tantra の記録がある。之は古いタントラであるが更に「タントラのタントラがある」と何回も繰返して古いタントラの存したことを示し、同時に Kubjikamata, Kulālikamāyā, Śrīmata, Kadimata, vidyāpīṭha, Diyaugha-sadbhava 等の異なるタントラ學派を示し、更に古代タントラ學派として「東西南北上」の五派を挙げ、特に「タントラは西方より来る」という言葉を繰返し、Kubjika 學派が西方所屬たることを強調し「Śaiva の其は Veda より高く南方の其は Śaiva よりも高く西方の其は凡つよりも高く」と述べてゐる。次に Oḍiyana, Jāla, Pūrana, Matanga, Kāmākhyā 等の聖地と共に Kōh-kana, Cela, Balhka, Baṅgala, Kāmarūpaka, Magadha, Saindhava, Garjāra, Lāḍa 等の諸國をも示し、更に「南方に Devayāna 北方に Pityāna 中印に Mahayāna」と記して興味を興へてゐる。最も重要なのは「斯る修行(タントラ)は吠陀以外より來り、印度以外より來たのである」と述べて著者は極めて Magis に恐れてゐる。彼等は嘗て Sayṭhia や Parsia から續々入印し Sakadīpa 婆羅門として取扱れた種族である。彼等によつてタントラの修行がもたらされたものと Sastri 博士は堅く信じてゐる。筆者も其に同意する。

(四) 眞言密教の民間信仰的種々の相……(一) 民間信仰運動と

那爛陀時代に印度佛教史の轉換を示す眞言密教(木村)

しての眞言密教には、(1) 密教曼荼羅は民間信仰を中心とする。(2) 普門と一門を分け投華得佛によつて守護神を定む。(3) 現世利益を中心とする世俗的悉地を有す。(4) 婆羅門の祭祀と印度教の供養方を攝取す。(5) 指導者と事相を重視す。(6) 人生理想の四目標を攝取す。(二) 易行運動としての眞言密教には、(1) 入我々入觀、正念誦、字輪觀等を有す。(2) 三劫の修行に對する三妄超越。(3) 六無畏に對する發菩提心。(4) 十地に對する初地即極等である。(三) 爲實施權運動としての眞言密教には、(1) 兩部曼荼羅に三部類と五部種族を網羅す。(2) 有相的種々の事相を有す。(3) 印度一般文化や科學的文化を攝取す。(4) 印度の慣習と器具を使用す。(5) 動植物を教義化する。(6) 絶對を顯わすに五大五字五色五形五輪等を以てす。(四) 綜合統一運動としての眞言密教には、(1) 吠陀アーリアン種族の祭祀、一般文化科學的文化及び悉地の凡てを綜合す。(2) 非吠陀アーリアン種族の供養、咒文、悉地等を綜合す。(3) 大乘佛教諸系統の教理や中觀、瑜伽兩學派の思想等を綜合す。(四) 攝外入心妙有化運動としての眞言密教には、(1) 婆羅門教の祭祀諸神悉地等の妙有化。(2) 印度教の諸神供養守護神等の妙有化。以上が眞言密教が有する民間信仰的種々の相である。尙を西印の Valabhi が「大日經」の發生地となり、南印の Amaraṅga が金剛頂經の成立地となり興隆した理由に關して種々の資料があるが、紙數の關係で次回の發表に譲る。

(參考書は省略)